

# 付着マダニからウイルス

## 岩国で治療 感染症の女性

### 国内初確認か

マダニが媒介するウイルス感染症「重症熱性血小板減少症候群」(SFTS)に感染した山口県東部の60代女性に付着していたマダニからSFTSウイルスが確認されていたことが22日、国立病院機構岩国医療センター(岩国市)などへの取材で分かった。付着していたのは動物などに寄生するタカサゴキラマダニ。感染の最終的な因果関係は不明だが、SFTSウイルスを保有するマダニが確認されたのは国内初とみられる。(堀晋也、大村隆)

女性は4月9日夜、岩国医療センターに救急搬送された。同日、SFTSには現時点では確立された治療法がない。マダニに詳しい山口大共同獣医学部の高野愛准教授(マダニ媒介性感染症)によると、今回の確認で、感染に対する時季や場所の注意喚起ができる上、SFTSウイルスのさまざまな情報を得られる可能性がある。タカサゴキラマダニは日本でも関東以西に広く生息している。動物などにも寄生するが、中国などでウイルスが確認され、感染源とされたフタトゲチマダニやオウシマダニとは異なる。

センターが国立感染症研究所(東京)に送ったところ、タカサゴキラマダニと判明。高野准教授は「人体に付着したマダニを除去し、適切な治療を行うことが重要」と話している。女性は4月14日に退院した。山口県ではことし1月、SFTSが国内で初めて確認された。SFTSはこれまでに少なくとも全国で13の感染例が報告され、うち8人が死亡している。

岩国医療センターで女性を担当した谷岡大輔医師(37)によると、救急搬送時、女性には意識障害があり、血小板と白血球の数値が異常に低下していた。4月14日に呼吸不全や肺の炎症などで容体が悪化、集中治療室に入ったが、酸素マスクの装着や利尿薬使用などを続けて回復。5月2日に退院した。

女性に付着していたタカサゴキラマダニ(国立病院機構岩国医療センター提供)



タカサゴキラマダニ

クリックク、成虫の体長は1センチ弱にもなる国内最大級のマダニ。田のあぜや山ぎわなどに多くすみ、イノシシやシカなどに寄生する。吸血時間が長いのが特徴で1カ月程度吸い続けるという。活動時季は3〜11月。家屋に生息するマダニとは種類が異なる。

岩国医療センターで女性を担当した谷岡大輔医師(37)によると、救急搬送時、女性には意識障害があり、血小板と白血球の数値が異常に低下していた。4月14日に呼吸不全や肺の炎症などで容体が悪化、集中治療室に入ったが、酸素マスクの装着や利尿薬使用などを続けて回復。5月2日に退院した。